

「ふれあい広場」の各コーナーで紹介する人を募集します。自薦他薦は問いません。日ごろ感じている意見や質問なども募集しています。
あて先=〒028-0592 遠野市東館町8番12号
市情報推進課広報広聴係 (☎@2111内線364)

ふれあい広場

ともに歩んで半世紀

① 青笹町

菊池 武 さん (73歳)

菊池 知子 さん (70歳)



ふれあいができてよかった
二人で旅行しましょう

・結婚のとき、五十年の思い出は—
(武) 昔は、親戚や近所の人たちが総出でかやぶき屋根のふき替えをしたものです。その中に居た妻を見てかわいいと思っていました。
(知子) 本当は農家に嫁ぎたくなかったのですが、父親に「食いつばくれない」と説得されました。親に感謝しています。
(武) 若いころは、仕事が大変でした。子どもたちが一人前になってから、二人で外国に旅行したことが思い出です。
(知子) 今から二十五年ぐらい前、ハワイのツアーにわたし一人で参加しました。お金がなかったのに、快く送り出してくれました。
(武) 今、お互いに言いたいこと—
(武) グラウンドゴルフの練習や試合に二人で一緒に参加することです。
(知子) 二人で一緒に旅行することです。
(武) ずっと、にぎやかでいてください。これからもよろしくお願ひします。
(知子) いつまでも元気であってほしい。二人でいろいろなところに行きましょう。

- ◆お仕事は…あえりあ遠野でフロントを担当して4年目になります。人と接することが好きなので、この仕事を選びました。
- ◆休日の過ごし方は…友達とドライブや買い物に出掛けています。
- ◆自己分析すると…神経質なので慣れない環境に弱いです。
- ◆理想のタイプは…うそをつかない人。
- ◆これからやってみたいことは…大型車の免許を取得したいです。
- ◆将来の夢は…お金持ちになって、馬主になりたいです。

青春のトーク

①



いつも笑顔で心掛けています

菊池 譲 さん

松崎町・23歳・O型・あえりあ遠野

学校 CLUB 紹介

①

経験を積んで 一歩一歩前進

青笹中学校女子剣道部



青笹中学校(山尾修二校長、生徒七十七人)女子剣道部は一年生五人、二年生一人の計六人で活動しています。九月に行われた地区新人大会では団体戦で優勝し、十一月下旬に開催される県大会に向け練習に励んでいます。

部長の齊藤知美さん(二年)は「常に雰囲気明るいチームです。部員みんなが中学校に入ってから剣道を始めたので、まだまだ経験が足りません。まずは練習や試合で経験を積み重ねることがチームの課題です。県新人大会では予選リーグ突破を目標に、みんなで声を掛け合い頑張ります」と力強く話していました。

顧問の蒲生正光、堀村克利(かろと) 教諭から…

前向きに取り組めばまだまだ伸びるチームです。基本を大切にこの冬の寒稽古をしつかり乗り切れば、来年の中総体では花を咲かせられるでしょう。練習だけではなく、日々の生活にも自分に厳しく取り組みましょう。

風の人

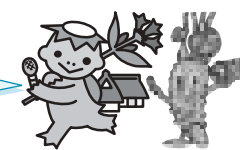
「森の名手・名人100人」に認定

馬の成長が自分の励み

菊池 盛治 さん (土淵町・69歳)



ひとこと インタビュー



北湯口 至 くん (附馬牛小・1年)

エジソンのような発明家になりたいです。マリオネットを作ったので、次はラジコンを作ってみたいです。



鈴木 愛裕美 ちゃん (附馬牛小・1年)

保育園の先生になりたいです。何でも教えられる優しい先生になりたいです。家では洗濯のお手伝いをしています。



多田 綾乃 ちゃん (達曾部小・1年)

スマレやチューリップの花が好きなので、お花屋さんになりたいです。学校の勉強は音楽が大好きです。



佐々木 凜 くん (達曾部小・1年)

電車の運転手になりたいです。おじいちゃんのお手伝いで、ショベルカーやトラクターに乗るのが大好きです。

大きくなったら何になりたい？

菊池盛治さんは、社団法人国土緑化推進機構から「森の名手・名人百人」森づくり部門に認定されました。「森の名手・名人百人」とは、森や山にかかわる仕事に従事し、優れた技を極め、他の技能者らの模範となる人が対象となっています。全国から百人が選ばれ、森林づくり運動などの指導者として活躍が期待されています。

菊池さんは十代のころから、父親と一緒に馬を使って山から樹木を搬出する「地駄曳き」を始め、

現在もその技術を伝承しています。「地駄曳き」は、昭和四十年代から自動車の普及とともに、専ら間伐した樹木をトラックが入れる所まで運び出す作業に変化しました。さらには重機の進出により、作業する面積も小さくなり、現在はほとんど見られなくなった技術です。重機は、山に道路を作ってから作業しますが、地駄曳きは昔のいわゆる通い道を使って樹木を搬出することから、山にやさしい集材方法といわれ、今でも必要とされ

る技術です。また、馬が活躍する場面は残されていると思います。馬は話ませんが、しぐさで具合が分かります。家族よりも馬を大事にしているかもしれない(笑)。好きな馬と一緒に仕事ができることに幸せを感じます。

地駄曳きは、いい馬、若い馬を育てることにつながり、馬の成長が自分の励みにもなります。体が動くうちは、わたしの生きがいとして地駄曳きを続けたいと思います」と話していました。